

第2章 八つのらせん局面からなる危機対処の学習プロセス

危機にあった人たちの体験に関する伝記の解析から、人間的な共同生活の欠落や、現在では失われたかとも思われる人間同士のつながりという次元に注意が向けられる。被害者は実際に、多くの場合にケアを受けているが、ケアをする人に関係能力が欠けていることがわかる。また、伝記の解析結果は、どのような局面で危機対処の援助が差しのべられるべきかという点に、手がかりを示している。この点に関してはまず伝記の動機を考えることが重要である。何が彼らに筆をとらせただろうか。

被害者はほとんど例外なく孤立状態にある。彼らにとって伝記は彼らのそばにいてケアをし、話し相手をする代理人の役割をはたしている。危機対処の困難な道程で、つまり苦しみを負いつつ危機を生きる学習プロセスにおいて、彼らはこの代理人には全幅の信頼を寄せることがゆるされているのである。

さらにまた、どの伝記もほとんど例外なく、彼らが学習プロセスをなんらの助力も得られず、自分一人で歩まねばならなかったということを示している。そのため、その三分の二は学習プロセスを早い時期に中断し、社会的に孤立したままでないければならなかった。そしてその三分の一だけがかるうじて社会的統合と言つ目標に達している。このような結果は予

想されていたことで、第一章でのべたころのケアをつけた被害者の経験とも一致している。これらのすべてに共通していることは、自分が受け入れられていないという気持ちである。

そのことについて次のようなことが問われよう。教会は何ができて、何をなすべきか。わたしたちは教会がおこなってきた多くのこと¹⁹を知っている。教会は福祉団体の専門職を通して、被害者のために十分に多くのことをしてきたと言えるだろう。むしろ厳密に言えば、次のことが問題とされる。教会とそのスタッフが、ことをおこなうにあたって被害者を中心にして被害者と共に適切な行動をするためにはどうしたらよいだろうか。教会員は、教会に結びつける目標をもって、社会的孤立に立ち向い、社会的要因から生じる苦しみを打ち破るための助力を、おこなうことができるだろうか。

社会的統合に向かっている道筋と社会的孤立に向かう道筋のおおむねを見極めるといふことは、わたしの研究テーマであり、一九九一年から現在に至る期間の入手可能なすべての被害者とその関係者の伝記の分析を行った。(四三丁―四七頁の図解を参照)

研究の成果として、学習プロセスの典型的な経過と一致し、危機対処のための手がかりとして立てることができる一定の法則が見出された。「危機対処の学習プロセス」が順調に行われた場合の最終段階として、社会的統合が生じる。研究は、多くの実践例と事例研究によって、また被害者およびまだ被害にあっていない人たちの生涯学習の状況によって、どんなに困難であっても、危機対処の学習プロセスが極めて有望であるということを証明してい

このテーマに関して、危機対処の長期間におよぶ困難な学習の道のりを思い浮かべて見ることが助けになると思われる。すくなくとも自身の状況を受けとめるためのさまざまな対応の可能性を明らかにするだけでも有益である。諸伝記に目を通すとよく分かるのだが、身体的障害や心理的障害、感覚器官の障害と精神の障害、および長期療養の病気、あるいは死を目前とした人生問題など、危機の引き金となったものが何であれ、社会的統合が達成される場合は、被害者とその関係者は例外なく、この学習プロセスの諸段階を通過し、克服しているように思われる。さらにまた、失業、パートナーを失うこと、迫害や拘禁などの自己同一性の危機を体験する人、また、自分はまだ被害にあっていないと考えている人も同じように危機対処の癒しの学習に入り口を見出すということが重要である。

危機対処の学習プロセスを実感として理解するために、自分自身ががんの告知を受けた場合のことを想定してみることもよいであろう。その場合、遅かれ早かれ、当然のことのように「なぜわたしが？」と問うことになるだろう。しかしながら「なぜわたしではないのですか？」という反対の問いに思いをめぐらすことはめったにないのである。第一の問いがこちらに浮かぶようであるならば、この時点ですでに、危機対処のプロセスの諸局面に足を踏み入れているのである。自分自身を探し出そうとする時として生涯におよぶ取り組みのダイナミズムを正しく評価するために、このプロセスをわたしは「らせん局面」として描いてい

る。「この道は次のように、区分される。

らせん局面() 曖昧状態

まず、危機が起こった当初はショック状態にある。危機の引き金となる事故、ニュースや事件が突然その身にふりかかり、秩序整然とした生活を崩壊させる。人は突然、通常の生活をはずれた状況に立たされることとなる。危機は引き金となり、被害者は思いもしなかった苦しみに直面し、激しい不安に襲われる。人は無意識のうちに経験者の対応事例に助けを求め、身を守り、避難所をつくり、合理的な儀式を行い、危機の引き金となったものを駆逐するために、あらゆることを休みなく行おうとする。そのようなことがあってはならないのだから、あるはずがないと考える。被害者はいまだに危機に向き合うことができず、さまざまな防衛メカニズムをつくり続けることによって避難所を設けようと苦闘する。

このような危機の周囲をめぐる宙吊り状態における、暗黙の否認が、すべての被害者に共通する特徴である。この「曖昧状態」をキューブラー・ロスは「事実を認めようとせず、孤立すること」と呼んでいる。しかしながら、「認めようとしない」とは、意識的な反応をさすものであり、それに対して「曖昧」という言葉は半意識的な状態やいまだ認識することができないままに、危機を否認し続けている状態を指し示すものである。そこで、いったいなにが起こっているのだろうか？という疑問はこの状態をあらわすものである。会話分析を学んだ人々には、この「いったい」という表現の背後に、受け入れたいという思いが

隠されていること、つまり顕在化してはいませんが、すでに危機の認識がなされていることが明瞭に理解されるであろう。

導入局面もしくは認識局面としてのらせん局面(1)をさらに詳しくのべることが、ケアをするために必要と思われる。この局面は、並行したり、一緒になったり、交差したり、さまざまな仕方で見合う典型的な三つの局面に分けて理解することができる。これらの局面の継続時間は一様ではない。

中間局面(1:1) 無知

「それはたいした問題ではない」「つまり事を大げさに否定的にとらえることはなかつと」考え、疑念が湧き上がるにしても、それは軽視され、とるにたりないものと判断されるのが常である。まだ分かっていないということから無知(1:1)という状況が生み出される。この無知(1)は、曖昧状態という局面の導入部である。以前とは異なる周囲の対応などさまざまな兆候が問題となる事実を指し示すことから、この無知状態は時をおかず変化していく。

中間局面(1:2) 不安

「やはり問題かも知れない」と考えることから、無知状態は不安(1:2)へと変わる。ここで特徴的なことは、湧き上がる疑念をもはや否定することができないものの、動揺した心理状

態は事実の認知を妨げるといふことである。現実が受け入れられるようになるまでには長い時間を要する。不安な状態にあっては、感覚が過敏となり、地震計のようにねらいを定めてあらゆることが事細かに記録され、事実を知るために、そして安心を得るために、類似した事例がさがし求められ、さまざまな解釈の試みがなされる。しかしながら、その目的はあくまでも不安(1.2)を解消し、やはり、たいした問題ではない」という安心を得るためである。

この中間局面には、まだ分かっていない当人の周囲に、医師や隣人や他の患者をはじめとした、すでに事態を理解している人がいることが少なくない。このことが状況を変える。事態を理解している人間は責任を負うこととなる。彼の態度は将来における信頼関係の確立の成否を左右するものである。彼らが事態を理解しているといふことは、いまだ了解に至らない被害者との関係にも常に反映し、事態の認識のプロセスに大きな影響を及ぼす。

さらにまた、特徴的なことは、増幅する不安から真実を受け入れる能力が生まれると考えられるかもしれないが、実際はそうではなく、心情的にしこ理解できないことであるが、危険に直面したことから自己防衛力が高められるといふことである。それは次の中間局面(1.3)の拒絶が始まる兆候をなしている。

中間局面(1.3) 拒絶

「間違いではなからうか」という疑問は、人生の可能性喪失を受容できないといふことを

表わしている。この中間局面は拒絶(1)(3)とよばれる。この段階では確実に迫ってくるものを頑(かたく)なにこばもうとする積極的な試みが様々になされる。もう一つの特徴的なことは安心できるものだけを見て、疑念を強めるすべてのものを無視しようとする選択的認知が行われることである。そして無知(1)(1)の状態に立ち返り、何も問題はないのだということが無理にでも自他共に説得しようとなえず試みるのである。

事実に対する情報ばかりがとりあげられ、それらに基づいた確認作業がくりかえされることとなる。場合によっては、「あなたもそうは思わないでしょう?」「という問いかけや、「はい、そうです。でも」という肯定を装った否認が繰り返される。この中間局面には真実を確信しないで、逃避しようとする最後の試みが見られる。またこの三つの中間局面の終わりは皆さんの第一局面の曖昧(あいまい)な状況のしめくりとして、確信によって解放されたいという言葉にならない願いがあらわれる。確信は耐え難い緊張に終止符を打つものである。

ケアのプロセスが欠けている場合は真実の発見に至るまでに長い時間を要することとなる。それはすこしずつ真実が伝えられることで無意識の了解事項を言語化するということが全く生じないからである。この認識局面もしくは導入局面は危機の対処の行程全体にとって重要な意味をもっている。このプロセスで適切なケアがあれば、危機対処は中断され、社会的な孤立にいたる危険を回避するための転換点が設けられることとなる。ここにおいて初めて学習プロセスが開始され、共に生きるための地平が開かれるのである。

らせん局面(2) 確信状態

曖昧状態(1)においてすでに告知されていたように、人生の可能性喪失がここにおいて不可避免的に確実となる。この局面2における感情を言葉にするならば、「そうです。けれどもそれはありえないのではないですか?」となる。それは否定しながら肯定しているように響き、また否認の継続のようにも思われるが、実にその双方を含んだものである。

自身の危機を認識した人であっても、以前と同じように生活を続けるために、たびたび危機を否定せざるをえない。被害者はありのままの真実を受けいれる態勢にあるものの、しかながら、ありえない事とは承知の上で、気持ちの上では、それでもなおあらゆる兆候がなにかの間違いであったと判明するのではないかという希望をもって日々を過ごすのである。

理性的な「はい」と、感情的な「いいえ」とが両方並存しているということは、確信状態(2)の局面を示す指標である。「はい、でも・・・」の両面の存在は、被害者と彼が受けた診断に驚愕することのあいだにあつて、時に応じて衝撃を吸収する緩衝器の役をはたす。それによって被害者には落ち着きを取り戻す余裕が生まれ、さらに、前に進むために新しいスタートを切ることが可能となる。それにもかかわらず、実際の状況についての会話というものはいづれも回避不可能な事実を示すものであり、理性的な認識と感情的な理解との間に生じた齟齬の解消をはかる上で、重要な役割を果たす。そのための決定的な条件は、被害者自

身の受け入れ態勢である。被害者は本当のことを話したいという合図を出さなければならぬ。その上ではじめて真実の発見が可能となる。真実が他人から少しずつ告げられることで徐々に受け入れられ、つまり会話の「話題」にされていくのである。

真実を問うということは、客観的で正確な情報や根本原理を問うことでなく、またコミュニケーションを伝えるという孤立した一回限りの行為でもない。そうではなく、送り手と受け手の間のコミュニケーション、つまり媒介のあり方の問題という非常に複雑なものであり、被害者とまだ被害にあっていない人（医者、専門家、ケアをする人）の間の結びつきや関係のありようの如何いかんが問われるのである。

そこで、真実を告げるといふことは真空の中で独り言を言うことではない。「あなたはがんです」「あなたの子どもはダウン症です」「あなたは脊椎損傷せきちゅうそんじょうの後遺症を覚悟しなければなりません」このような宣告はそれぞれに特定の状況にある人間関係の文脈の中で語られている。しかしながら、自己防衛に働く感情が抑おさえこまれることで、真実が理性的に受け入れられるか、あるいは被害者が情情的にも十分に耐えられる状態にあるのかどうかという点は不明である。「被害者とケアをする人」の両者は、襲いかかる運命に対してどのように向かい合うのだろうか？それはなによりもまずケアをする人の許容力の問題であり、コミュニケーション能力と癒しの能力の問題であるとともに、極限状態を前にしても揺るぐことのない精神的な安定性を保ちうるかと言ふ問題でもある。そもそも被害者は真実を耳にしても、

それに動揺することなく対処しようとする状態にありさえすれば、ありのままの真実を知るといふことは、彼の当然の権利である。

らせん局面⁽³⁾ 攻撃状態

当初の「理性的」で、「外部からコントロールされた」曖昧^{あいまい}(1)の局面と、なお相反する感情をあわせ持つ確信⁽²⁾の局面の後には、「心情的」で「コントロールできない」力にあふれた感情が爆発する局面が続く。

第一に、頭で理解したことがこころの経験として、わたしは今になってわかりました」と自覚され、こころの奥底で傷つきながら被害者は「なぜわたしが……？」と叫ぶのである。苦しみには限りがない。「このような意識下の作業は荒れ狂う感情の嵐に翻弄^{ほんろう}される。被害者は自己の感情に押しつぶされそうになることもある。またその感情を周囲の人間に向かってたたきつける場合も少なくない。後者は理想的なケースと言つことができる。この激しい抵抗はまさに攻撃状態⁽³⁾とよぶにふさわしいものである。ここにおいて問題となるのは攻撃の真の対象、つまり危機の原因そのものは捕捉^{ほくく}不可能であり、それに対して手出しをすることができないといふことである。そのために攻撃を向けるべきかわりになる対象が求められることとなり、手近にあるすべてのものが標的とされるのである。

このように攻撃は、具体的な理由もなしに、あらゆるところで、すべてのものに対して爆

発する。被害者にとっては彼がどこに目を向けても、視野に入るあらゆるものが攻撃の要因となる。当人は意識していないものの冷静に対応することを可能にするために感情の過剰なストレスをはき出すはけ口を探しているのである。しかしここで新しい悪循環が始まる。

曖昧状態^{あいまい}の局面において、しばしばごく早期から問題を認識していた周囲の人たちが同情からあやまった対応をし、そのために被害者の事態に対する否認を助長したのと同様に、攻撃^{こうげき}の局面においては被害者の抗議を導く。もし彼らの抵抗が安全弁としてではなく、個人的防衛反応の爆発として、間違っ^{まちが}って受け取られる場合に、被害者はその防衛反応をさらに強め、それによって周りの人たちを苦しめることとなる。さらに、苦しみに打ちのめされた人は、周囲の全員が彼に対して共同で攻撃していると理解し、現実からはじきだされ、絶縁されているかのように感じる。適切なケアが欠けている場合に、被害者にどのような危険がもたらされるかということが、この局面において特に明瞭にあらわれている。自己の攻撃性に押しつぶされて消極的もしくは積極的な自己破壊に向かったり、まわりの人々のとげとげしい発言によって孤立を余儀なく^よされたり、否定的な感情が内向することから無感動なあきらめの状態に落ち込んだりするのである。攻撃の局面が学習プロセス全体の中で、感情的な危機対処の導入局面として極めて重要な意味をもっていることが明らかになってくる。

攻撃の中で解放された感情的な力は行動へと向かう。絶望的な状態を前にした無力感から立ちなおるために考えられる限りのさまざまな対策が手当たり次第にとられることになる。「苦しみを捨て去ろうとする試み」は際限なく続けられ、時と共にそのために投資金額も増大するようになる。取引と交渉が始まる。被害者の経済的状況や価値観によって、二種類の展開が見られるが、そもそもコントロール不可能な状態にあるので、その両者が並行しておこなわれることも少なくない。一つは医療機関を転々とする、医者デパート「巡り」であり、もう一つは「奇跡の道」の探求である。大勢の医者や外国の専門家たち、民間療法家にいたるまでだれにでも治療を求め、家庭崩壊さえ導く、高額なお金を費やしても、一縷の望みにすぎない最終的な診断を先のばしにしようとするのである。それと同時に、伝記の三分の二に見られるようなルルドへの巡礼をはじめとした、ミサ依頼、礼拝での按手、誓約、教会や人道的施設へのすべての資産の寄付、修道院入会の誓願、さらに徹底的な回心の誓いなどありとあらゆる「奇跡の道」を突き進むこととなる。すべては「これさえすれば、もしかしたら……。」という思いにかられることである。このようなコントロール不可能で情動的ならせんは、被害者の最後の抵抗として理解されるべきである。それは交渉状態とよばれる。もしも、被害者が一人きりでその人生を歩まねばならないとしたら、その道はどれほど危険に満ちたものであるかということがここでも明らかである。そのような場合は物質的にも精神的にもすべてが失われる、「掃セール」に終わることも少なくない。逆に言えばこの

局面において、自身の反射的行動が理解され、それに対する対応法が習得されている場合は、失望の多くを回避することが可能であるといつことも明らかであろう。

らせん局面⁽⁵⁾　うつ状態

「医者の特バート」巡りや「奇跡の道」の途上で行ってきた交渉のすべては、遅かれ早かれそのいずれもが徒勞であつたことが明らかになる。末期がんの患者は間近にせまつた死を避けることができず、事故により脊髄損傷を受けた患者は足の感覚が失われたことを認めざるをえない。ダウン症の子を持つ母は、その子の行動や表情を直視しないわけにはいかなくなる。

外部に向けられた情動は焼尽し、それに代わつて希望の喪失による内向的な心理状態が生じ、被害者は沈黙の部屋に導かれる。被害者は前の局面でさまざまに手を出し、その失敗のたびごとに挫折感を味わっている。「なんで、こんなことをしたのだらう。なにをしても無駄じゃないか」と、絶望と断念の深みに沈みこむ。彼はらせん局面のうつ状態にいる。嘆きと涙もある種の言葉であり、悲惨な損失に打ちのめされながらの体験や痛み、そして受身的な抵抗のしるしである。失われてしまったものが理性的にだけではなく、心情的にも理解されるようになり、失われたものにこだわることはなくなる。そしてまだ残されているものに目が向けられ、それらをもとにして何ができるのかといつことも考えられるようになる。

る。失われたものの種類もそのための悲しみの様相もさまざまである。もつ歩くことができ
ない。待ちこがれている健康な子をもつことはない。将来に生じると思われる悪い影響に対
する不安、もつ行くことはない仕事場のことや、社会階層を落下するということ。夫や妻と
しての意味の喪失、去って行く友人。人生の目標の崩壊。損失体験の受け入れと、将来の人
生の制約の予見による二種類のうつつに共通することは、非現実的な希望を捨てるということ、
つまり夢想郷と決別するということである。

自分が見捨てられるのではないかという不安とあきらめのなかで、とりもどすことのでき
ない損失を否定しようとするあらゆる試みは、最終的に放棄されることとなる。この放棄は
深い悲しみをともなつものであり、それはある種の悲嘆の作業ともいえる。この作業は運命
を受け入れるための準備であり、方向を転換し、自身の内面へとむかい、自分自身と出会う
ための転機である。このような自分自身の発見から苦しみの経験に距離をおき、それに対す
る新たな行動を自ら構想するための余裕が生じるのである。

らせん局面⁽⁶⁾ 受容状態

らせんのこの旋回域^{せんかいいき}の特徴は極限の体験の意識化にある。被害者は理性的領域と心情的領
域とにあるすべてのものと闘う局面を苦しみながら耐え抜き、抵抗する力を出し尽くした。
彼にはもう余力は残されておらず、彼はほとんど茫然自失^{ぼんぜんじしつ}の状態であるが、しかし、そこに

は限界を超えたという解放感も漂たまたまっている。被害者はありとあらゆる可能性を徹底的に考えぬき、現在失われているものと将来に失うであろうものを思い、嘆き悲しんできたが、今や気力も尽き果て、終局にたどり着いたのである。しかしながら解放されたように新しい展望を開く準備ができている。何者にもとらわれず自分自身を振り返りながらも、その自分自身を捨て去ることで、そこに何かが育ち始める。

被害者は自分自身が今なお存在していることに気づき、自分が一人ではないこと、自分の能力を利用することができることに感動し、そして自分の思考能力や感情など人間としての十全な能力を忘れていたことを恥はづかしく思う。堰せきを切ったようにさまざまな経験が彼に降りかかり、世界が広がる。そしてついに「やっと分かった」という理解にいたる。わたしはここにいる。わたしにはできることがあり、それをやるうと思う。わたしはわたしを受け入れ、わたし個人の独自性と共に生きる。この局面はそれゆえに受容状態（6）とよばれる。わたしはまひした足を持つわたしの独自性を受け入れる。わたしは障害を負う子の母であるわたしを受け入れる。わたしは危機に逆らうのでなく、危機と共に生きる。わたしは他のみんなと同じ人間である。だれでも自分の危機や限界を生きていることを学ばなければならず、その上で生きるのである。わたしの人生を生き、そして学ぼうと思つ。

受容状態とは、ある平穏な状態として理解されるようなたんなるあきらめを意味するものではない。受容状態は同意された容認ではない。自から耐えがたい損失を認める人はいない。

しかし、自身の危機の対処にあたって不可避的なことを受け入れることを学ぶことは可能である。それによって自身の意識の限界を超えて受容の能力が芽生えるのである。

らせん局面(7) 行動状態

独自性をもって生きようと決断することは、独自性に逆らって闘ってきた力を解放することであり、それによって行動がうながされる。「わたしはこれをします」という表現はこの転換をあらわしている。理性的・情動的な力にみなぎった状態のもとで最適な自己のコントロールがなされ、局面(7)の行動状態の第一ステップが踏み出される。被害者は何を持っているかが大切なのではなく、持っているもので何をすることが重要であることを理解する。

これまで経験してきたことをもとに、被害者の中で直接的にも間接的にも、価値と規範の再編と構造改革が行われる。このことは現行の支配的な規範 価値 システムの外ではなく、その中において起こる。規範 価値 レベルは同じままであるが、視点が変更されたことによって新たな再編が行われる。

行動や思考が現実の事態を変えるということは確かであるが、しかし、重要なことは、被害者自身がまず変わり、この学習プロセスによって目的としてではなく結果としての、社会システムの変革へ一歩を踏み出すということである。ここで変革とは、それ以前とは異なった人間になるという可能性を獲得するということであり、それは与えられた限界の中で自ら

進んで行動に踏み切り、それによってあらわれる新たな自己像がもたらす別様の行動の見通しによって生み出されるのである。

らせん局面⁸⁾ 連帯状態

苦しみにあつた被害者は、これまでのべてきた諸局面において、適切なケアを受ければ、時と共に自分も社会の中で責任ある行動をしようと思つようになり、その人の活動領域、その人の独自性は、より広い生活圏とのかかわりの中で認知されるようになる。被害者にとつて障害となるものは背後に退き、社会的な活動領域が意識されるようになり、共同での行動に目が向けられる。連帯状態⁸⁾は危機対処の学習プロセスの最後のステージである。

「わたしたちがやります。わたしたちがイニシアティブをとります・・・！」これはうまくいった危機対処の表明であり、社会への適切なインテグレーションをあらわしている。この最後のらせん局面にまで到達する被害者は限られており、まだ被害にあつていない人にとってはこの局面にまで達する人がまれであるということとは当然のことである。

障害者の危機対処や治る見込みのない病人の危機対処を、避けがたい生存の危機の中にいる人たちの闘いと比べると、共通した特徴を見ることができると、重荷からの解放という意味では結局のところ最終解決はなく、唯一の可能な解決は、受け入れがたいものに対して抵抗を続けるのではなく、それと共に生きることであり、それはつまり、個人的にも共同的にも

取り組むことが求められる新たな課題を担うということである。

結論を先に言えば、このような取り組みは有意義なものとして、また幸福感をもって体験されるのである。共同生活に積極的に関与して何かに取り組むという能力は、わたしたちの社会の過度の「成果主義」の中にあっても、それとは別の生き方をする人によって達成される「自己実現」である。この困難な道を歩きぬくように励ますものは、能力を与えられていない人はいないということであり、人はだれでも全体の一部であり、その全体は部分をあわせた総体以上のものであるということである。

わたしたちはこの八つの局面において、危機にあつた被害者自身、苦しんでいる人自身が、らせんをめぐるようにみずからの反応とまわりの人たちの矛盾した反応など、さまざまな経験を積みかさねたうえで、新しい人生について十分に納得するにいたることを理解する。

らせんの図は、内的プロセスが閉ざされていないだけでなく、また他者との触れ合いや、行動の経過の中で、各領域が「つぎ巻」に重なり合っていることを示している。この図は、被害者が厳しく制限された人生を、生きるに値するものと受け入れたとしても、困難な学習は一生続くことを示している。らせんは、ここで、ただの技術的な意味で理解されてはならず、むしろ、それは旋回する道筋の不可視の案内人に従いつつ、自身の力で踏破トクハすることを象徴しているのである。この道は生きる意味の崩壊や断絶、放棄に至るものではない。それ

は、「生命に通じる狭い門」(マタイ七・一四)の二つの形であり、たとえようもなく不確実な道ではあるが、またわたしたちがどのようになるかを予感させる道である) 三ハネ三二)。

わたしたちは何のために、それほどまでして、被害者の体験の仕方に関り合つのだろうか? 危機対処の学習プロセスにおける八つのらせん局面を知ることが、障害を負っているという事態「や」がんを病んでいるという事態」の状況を楽しにするというのだろうか。

危機対処の学習プロセスの特徴の発見は、すべての人が、個人として、教会員の一人として、牧師あるいは教育者として、より適切に、よりこまやかに危機にあっている人に関わるべきであると言つて要請にあるように思われる。

上述したように、危機に見舞われている人とは被害者だけでなく、被害者にかかわる周囲の人たちのことでもある。(4章の「被害者の問題としてのケアをする人」(参照)たとえば、わたしたちは、被害者、がん患者の隣人、あとに残ったパートナー、障害児の母などを訪ねる。すると、「なにしに来たのですか?」「だれもわたしを訪ねてくれません」「みんながわたしのことをあきらめています」という攻撃³⁾の標的になる。危機対処の学習プロセスにおけるらせんの個々の局面が分かると、攻撃は実際にわたしたちに向けられているのか、それとも第3のらせん局面にあって 情動的なコントロール不可能状態に陥って 攻撃³⁾を爆発させるための対象をわたしたちの内に偶然見出しているのか、どちらかを見分けることが

できるようになる。わたしたちはそのために他の人たちと一緒に、彼の、もしくはわたしたちの攻撃性について理解を深めていくことができる。伝記を分析すると、罪責感、自殺、現実逃避などの九種類の反応があらわれている。このことから解釈と再解釈によって変化のチャンスが生じる。教育的に言えば、「他の者に変わる可能性」を危機の調停や予防を通して得ることができる。神学的に言うならば、「十字架と復活の秘義」を受容状態⁽⁶⁾の体験に基づいて理解可能にさせることができる。

はつきりしていることは次の通りである。わたしたちは危機や十字架をなくすことはできない。わたしたちの事例では、がんやパートナーの喪失、子供の障害は、生涯つづくものである。しかしながら、わたしたちの、危機にあり十字架を負う人たちの置かれた状況や苦しみの様相を変えることができる。わたしたち自身を変えることができる。そうして限界を超えていくことができる。

相互のケアを通して孤絶状態におけるふれあいの欠落によって、さらに社会的障害が生じるが、このような障害は相互のケアを通して克服することが可能であり、そのためにも一度相互活動を構築し、われわれの側からもう一度関係を結びなおそうとする試みが始められなければならない。これこそ教会とそのスタッフによる危機対処への人間的ケアであり、福音の提供と言えるかもしれない。危機対処の学習プロセスのすべての詳細や、生涯学習における知見と実践をここで述べることは控えたい。⁽²²⁾その代わりに、従来の苦しみと信仰の

関係をとりあげ、これまでわかった認識を更に発展させよう。

伝記の分析によると、被害者が社会的統合への到達を望むのであれば、危機の種類、如何を問わず、危機対処の学習プロセスをたどらなければならないということがはっきり確認できる。

上記のことに関する伝記の事例研究は次の通りである。

パール・S・バック²³の「子ども」知的障害、クリステイ・ブラウンの身体障害²⁴、ヘレン・ケラーの感覚器官障害²⁵、クララ・パーク²⁶の心的障害。

さらに、(らせんの第3局面の)「攻撃」がカタルシスとして重要な役割をもっていることが確認されている。(らせんの第3局面の)攻撃能力と(らせんの第6局面の)受容能力は密接な関係がある。²⁷「攻撃局面の欠落や中断あるいは自制は危機対処の学習プロセスの中断を引き起こすことがありうる」ことが、伝記上の事実から証明されている。ケート・ケラー「感覚器官障害」²⁸の場合、このプロセスがしばしば座礁し、うつ状態が生涯にわたって続いた。また、クリスタ・シュレット「身体障害」²⁹の場合、あきらめの状態、マジヨリエ・シエイヴ「知的障害」³⁰の場合は拒絶状態で中断が生じている。それに対して、リカルド・ダンブロージオ「心的障害」³¹の場合は、まったく逆に治療が加えられたことよって攻撃状態が惹き起こされ、危機対処は社会的統合にまでいたっている。

しかしながら、被害者とその関係者たちは、苦しみや危機を信仰者としてどのように経験

したのだろうか。

言い方を変えれば、キリスト教信仰が危機対処の学習プロセスにおいて担う役割が問われるということであり、さらに極端に言えば、キリスト教信仰は危機対処の要因でありうるのかということである。あらかじめ言えることは、キリスト教信仰は前提要因以上のものであり、わたしたちの人生の方程式の展開を決定する重要な記号であり、基本設定であり、見解や解釈だけでなく、被害者の危機対処をも左右する構成要素であるということである。

以上のことから基礎命題を導き出すことができよう。

・ 皆さんの第3局面の攻撃状態は、危機対処の学習プロセスの中でカタルシスという重要な役割を担っている。

この命題を展開すると次のようになる。

・ キリスト教信仰は、攻撃(3)を神の前での訴えと悲嘆の中で、カタルシスとして受けとめる。

キリスト教信仰は、被害者に苦しみや危機を神が課したものととして肯定し、疑うことなく、

つまり「従順」に受けいれることを可能にさせる。これは信仰者のいわゆる「ナイーブでアパティー」な対応と言えよう。

また他方で、信仰は、被害者たちに苦しみや危機に対する（らせんの第3局面）の攻撃を爆発させることを可能にし、まず攻撃を行わせることで、その次に神と対話をしながら、攻撃をこらえることを学ぶ場を生み出し、すべてを肯定した上での（らせんの第6局面）の受容の能力を生み出すのである（ヘブライ5:8参照）。これは信仰をもった人のいわゆる「批判的で共感的な「対応と言えよう。」（これについては第5章「苦しみと苦しむ能力についての神学的展開」を参照）

学習プロセスの第一の形の中で、信仰者はナイーブでアパティーな対応により、文句なしに「従順に」自分の障害者であるという事実を受けとめ、危機を神からの「罰」また「試験」として無条件に受けとめているように思われる。信仰者はだれでも、被害者であるか否かにかかわらず、神から無条件に肯定されており、それによって、耐えられないと思われるものを、まさに神から負わされた荷として受け止めるすべを知っている。そして、自身の危機と共に生きるすべを知っている。それゆえ、引き続いて、ナイーブでアパティーな受容状態が実現するのである。

伝記類は次のことをわたしたちに伝えている。

・キリスト教信仰は

被害者を孤独から解放し、対話と連帯に導く。

被害者に向き合う人、昼も夜もいてくれる人を与える。

話し相手になって、一緒に祈る人、聞いてくれる人を与える。

決まりきった処方箋のような対応をしない助言者、共にまよい悩みつつケアをする人を与える。

自分で聞き、考え、受け入れなければならない福音と提案を与える。

わたしから解放し、わたしに対して解放し、あなたに対して解放し、祈りの中で解放し、礼拝の中で解放し、教会の中で解放する。

・キリスト教信仰は攻撃⁽³⁾を支持し、受容状態⁽⁶⁾を生じさせることができる。

つぎに、伝記の分析を通して、キリスト教信仰と人のケアが被害者の人生にとって、病気や障害などあらゆる種類の危機の際にどのような影響を及ぼすかをのべよう。

1
図版
伝記のデータ

- 図 1 伝記が出版された国
- 図 2 伝記の出版年、出版数、テーマ
- 図 3 作者の視点、と危機的体験の数
- 図 4 危機対処に関する伝記、テーマの変遷
- 図 5 社会的相互活動としての危機対処

図 1



図 2

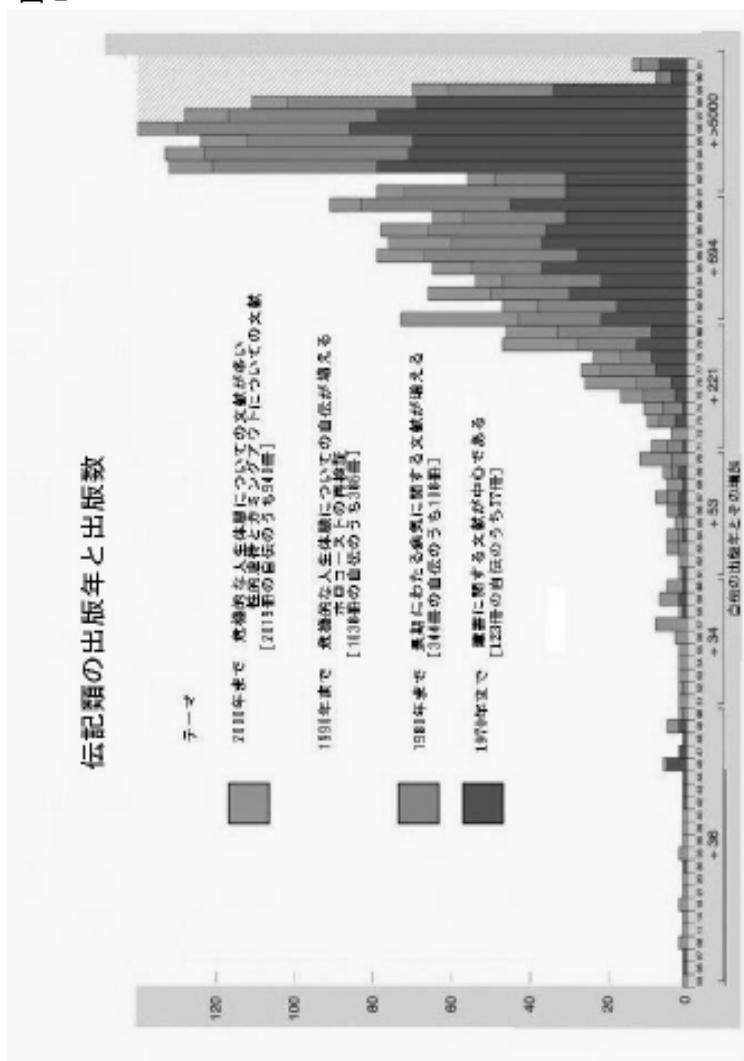


図 3

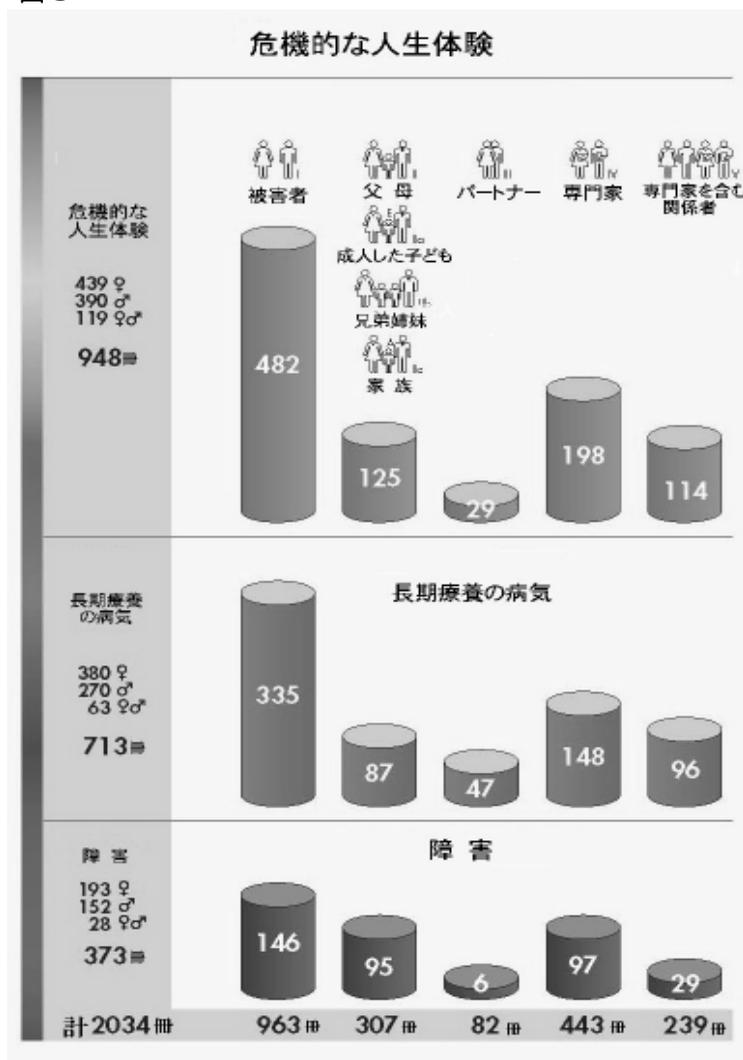
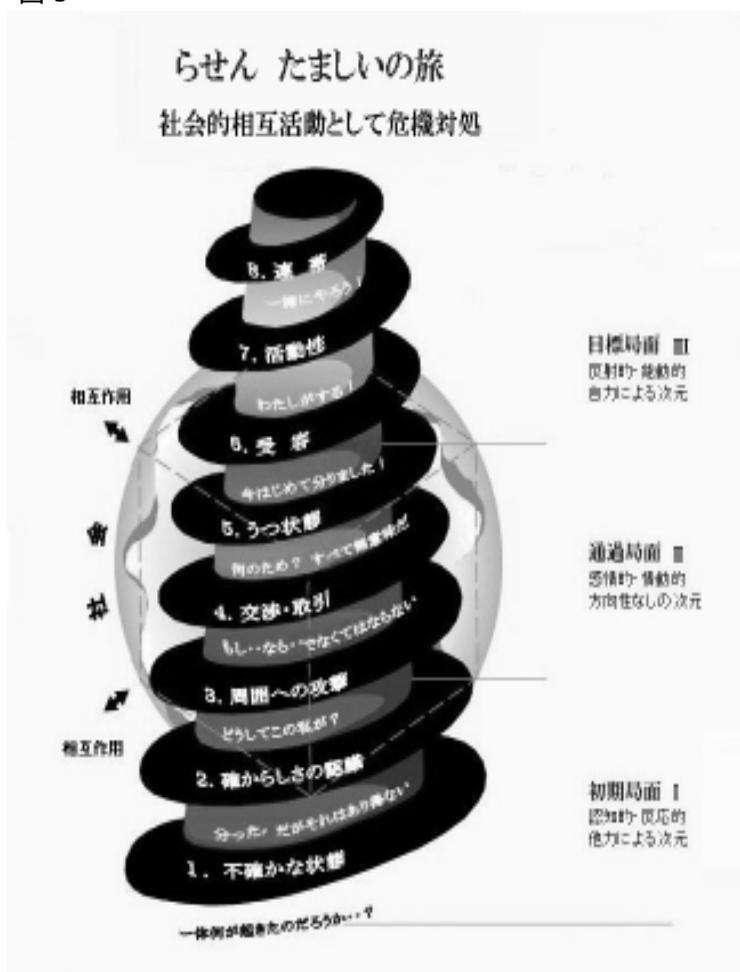


図 5



2 パール・S・バックの危機対処「母よ嘆くなかれ」の事例研究

「これまでのべてきた危機対処の諸局面は、知的障害を負う子の母パール・S・バックの自伝「成長しなかつた子ども」(The child who never grew, New York 1950)を例として取り上げることで具体的に理解されるものと考ええる。「この本はドイツでは「最愛の不幸な子ども」(Geliebtes unglückliches Kind, Wien/Heidelberg 1952)という書名で翻訳されている。「日本では「母よ嘆くなかれ」(法政大学出版局、一九九三)という書名で刊行されている。」

ノーベル賞受賞者、パール・S・バックは類似した状況におかれた多くの母親と同じように危機を体験している。彼女が経験した危機対処は二千を超える伝記のすべての人びとの典型と言える。彼女はケアのない学習プロセスが十年以上の年月を要したことを記している。彼女の危機対処はこれらの人々の典型であり、この点で、どのように危機に対処してきたかを伝える女性たちの大多数を代弁している。危機への対処は理性の問題ではなくこころの問題であること、すなわち、コミュニケーションのレベルで気持ちの持ち方や態度を変えうる準備ができているか、またその能力をもっているかどうかという問題であるということ、彼女が知識人として明らかにしている。

「避けることのできない悲しみにどう耐えていくかを学ぶことは、決してなまやさしいことではありませぬ。わたしは今になってやっと、わたしの字んできた道を一つ一つふりかえってみることができる

ようになりました。

とは申せ、かつてわたしも、それを学ぶ過程にあった頃には、それは非常にむずかしいことでした。目の前の一步一步は本当に越えがたい山のように思われたものでした。」(59)

「取り除くことのできない悲しみを抱きながら生活しつつけていくには、ではどうすればよいのか、ということについて申し上げることは、わたし自身にとっても興味のあることであり、また、あなたにもその過程を知るには意味があることなのではないかと思えますので、わたしはそれをこれから、申し上げていきたいと思えます。」(65)

「もう一度申しましょう。わたしは経験した一人として、お話ししているのです。」(139)

パール・S・バックはその小説家としての技量を尽くして、一人の母として無限の愛をもつて、一人娘、成長しない子のことを描き出している。そしてそれは取り除くことのできない悲しみを抱きながら……彼女がどのような困難な学びの道を歩まねばならなかったのかという告白と表裏一体をなしている。

パール・S・バックはすでに一九五一年に、一年にわたる「学習過程」の二つの局面を区別している。その第一の局面で彼女は破局を経験し、わたしに襲おそいかかってきた避けることのできない事実を理解すること、を学ばなければならなかった。第二の局面で、彼女は「自分自身からの転機」を体験し、そして運命を「与えられたもの」として受けとめ、自ら展開させるべく、課せられたもの」との理解にいたる。

「いったいどうしたらよいかを悟る過程の第一段階「局面」は惨めで、支離滅裂なものでした。前にも申したとおり、いっさいのものに喜びが感じられなくなってしまいます。すべての人と人との関係だけでなく、あらゆるものが意味を失ってしまうのです……。」⁽⁶⁵⁾

悲嘆に打ちひしがれ、途方にくれる中で、どのようにして自分を取り戻していったか。その様子が、受容状態⁽⁶⁾へ向かう転機についての分析において、描かれている。

「わたしはいつ、どのようにしてわたしの魂の転換がきたのか、はっきり覚えていませんが、それはわたし自身の中から生まれ出てきたのは確かです。……」^(第2局面)

世の人々が、避けることのできない悲しみを知っている人と、まったく知らない人の二種類に分かれることをわたしが知ったのは、その頃のことでした。⁽⁶⁷⁾

「そのような人がとても多いこともわかりました。そしてその人たちの悲しみが、わたしの場合と同じような原因からきたものであることもわかり、驚くとともに悲しい気持ちになりました。そのことでわたしが慰められたわけではありません。その人たちもまたわたしと同じ重荷を背負っていることを知ったからといって、わたしにはとても喜ぶことができなかったからです。そしてわたしは、その人たちが悲しみを抱きながら生き方を悟ることができるのなら、わたしにもできるはずだと思いました。今にして思えば、それがわたしの魂の転換のはじまりであったようです。」⁽⁶⁸⁾

パール・S・バックにとって、「学習経過の諸ステージ」は通過段階と共に始まっている。しかし、伝記を読み込むと、彼女は全部で二千をこえる伝記作者の大部分と同様に、曖昧状態⁽⁷⁾から確信状態⁽⁸⁾に進むために、導入段階に三年以上の時を必要としている。彼女は、この時期のことを次のように書いている。

「今になって思うのですが、娘が発育の面でかわったところがあることに気づくのに、わたしが一番遅かった、ということですよ。・・・わたしがはじめて娘のおかしさに一抹の疑念を抱きはじめたのは、すでに三歳になっていたときです。」〔24〕

さらに、まわりの人たちの不適切な態度やケアの足りなさ、真実を見極めることをどんなに妨げていたかを、彼女は書いている。

そして中間局面の無知状態(1:1)から不安状態(1:2)への移行期に、次から次へと友人たちを訪問しては確証を得ようとしていた様子を描き出している。

「わたしは娘にたいする不安を友人たちに話し、ついでにその人たちの子どもとも尋ねてみました。彼女たちの答えは慰めに満ちたものでした。」〔26〕

パール・S・バックは、なんらの問題もない「・・・かのようにふるまう」という「世間によくある約束事」に基づいた典型的な対応を的確に描写している。彼女は「ごまかして慰めようとする不適切な言葉が、あまりにも多い」と感じていた。

「友人たちは善意に満ちた人ならばよく使う上だけの保証をわたしにいっぱい聞かせてくれたのです。わたしはまた、それを信じていました。ずっと後になって、わたしが本当のことを知ったとき、この友人たちに、娘に降りかかっていた悲しい運命のことを、そのときにわかっていたのではないかと聞いてみました。その人たちはやはりわかっていたのです。もしやと思った人や、たぶんそうだろうと思っていた人もいました。・・・年配の人の中には本当に知っていた人もいたのです。しかし、だれもすすんでわたしにそれを話してくれなかったのです。」〔26、27〕

「このように、事の重大さを過小視しようとする世間の習慣を破ろうとする人が一人もいなかったためにパール・S・バックは子どもが4歳になるまで拒絶状態¹⁾という中間局面にとどまらざるを得なかったのである。

「わたしが娘の知能の発育が進んでいないことをはっきり知ったときは、すでに四歳に近かったのです。．．．わたしは最後の最後まで真実を認める気にはどうしてもなれず、また信じようとしなかつたのです。．．．。」²⁷⁾

「しかし、わたしはその頃からすでに意識している以上に、ずっと不安がつづいていたようです。と申しますのは、今でも覚えているのですが、わたしは、あるアメリカ人の小児科医が入学前の子どものことについて講演するのを聴きに行き、わたしの娘になにか非常におかしなところがあるのではないかと思つたことがあつたからです。」²⁸⁾

多くの医院を巡り、講演を聞き回るといふことを彼女ははじめ、さらに医者への往診をも依頼したのであるが、その診察結果はいずれもあいまいなものであつた。

「どこかが悪いのですが、わたしには見当がつきません。別のお医者さんに相談する必要がありますね。．．．。」³¹⁾

「どこかが悪い」という確信²⁾を抱いて、パール・S・バックは全米大陸を旅し、希望を手に入れるため世界中の医者へのデパートをめぐる交渉⁴⁾の局面を開始した。

「それからというものの、このような子ども親だけが知っている、あの長い悲しい旅がはじまつたのです。わたしはその娘と同じような子どもの親たちとじっくり話しあつた経験が幾度となくありますが、

どなたの経験も同じでした。どこかに自分の子どもを治してくれる人がいるにちがいないと信じて、その人を探して、世界中を歩きまわります。」(35・36)

彼女は、避けられない真実が知らされた瞬間のことを旅の終りとして描き出している。

「ある冬の日、わたしと娘との悲しい旅はミネソタ州のロチェスターで、ついに終わりました。そのメイヨー病院でのことでした。」(43)

そのときわたしには、生きている限り、感謝しなくてはならない一瞬が、幸運にも訪れたのです。．．．その方は、わたしと娘が通りすぎようとしていた人気のない部屋から静かに出てこられたのです。．．．

そのお医者さんは、手まねきでわたしを呼ぶと、人気のない部屋について入るように指示してくださいました。．．．彼は早口に、不正確な英語で話しはじめました。その声は荒々しく、その目はわたしをじつと睨んでるように見えました。『部長は、お嬢さんが治るかもしれないといったのでしょか?』

『わたしの話すことをお聞きください』とそのお医者さんは、命令するように、こういわれました。『奥さん、このお嬢さんは決して治りません。空頼みはおやめになることです。あなたが望みを捨て、真実を受け入れるのが最善なのです。でなければ、あなたを命をすりへらし、家族のお金を使い果たしてしまってください。お嬢さんは決してよくなるたいたです。．．．わたしはあなたのために本当のことを申し上げているのです。』(46・49)

このような、残酷な真実が告げられたことによる、子どもは当時5歳になっており、また周囲の人々からの、適切に按配された真実の告知のチャンスは逃されてしまっていた。際限のない絶望のあらわれが、子どもの死を願う攻撃として表れたことも理解されよう。

「死んだほうがもっと楽かもしれない、死はそれで終わりなのですから．．．そんな感じなのです。か

つてあつたものはもはや存在しないのです。もしわたしの子どもが死んでくれたなら、どんなにいいかと、わたしはこころの中で何べんも叫んだものでした！このような経験のない人たちにとっては、これは恐るべきことのように聞えるにちがいありません。でも同じ経験をもっている人たちには、おそらくこれはなにも衝撃を与えるようなことはないのです。わたしは娘に死が訪れることを、喜んで迎えたでしょうし、今でもやはりその気持ちに変わりはないのです。もしそうであれば、娘は永遠に安全であるからです……」(80)

彼女は率直に言葉を継いでいる。

「その険しい道を歩いておられる人たちのために、わたしは自分のこころの葛藤かつとんが長い年月つづいたことを正直に申し上げたいのです。……こころが混乱こんらんしきついているときには、いつでも常識や、義務の教えるとおりに動けるものではないのです。」(83・84)

パール・S・バックはつつ状態⁽⁵⁾の期間を「学習」の第1局面として振り返っている。ここで留意すべきは彼女自身が自身の経験として二種類のつつ状態 予見的つつと受容的つつ を説明しているということである。予見的つつは、だからから見棄てられることになるであろう娘の不安定な将来について悲嘆するものであり、受容的つつは失われた輝かしい人生を思い、そして孤立への引きこもりを悲嘆するつつである。

「わたしには自分に二つの問題が残されていることを知ったのです。そしてその二つの問題とも、わたしには耐えられそうもなかったのです。一つは娘の将来の問題でした。」(53・54) 第二は「自分自身の惨めな生活をいつたいたいどうしたらよいか、という問題ものしかかっているからです。人生のすべての明

るさま、親としての誇りも消え去ってしまつたのです。いえ、誇りがなくなるばかりでなく、それ以上に、生命がその子でもって途絶えてしまうような生々しい感じさえするものなのです。つまり、世代から世代へと受けつがれていく生命の流れが堰止められてしまつような、そんな感じなのです。〔59・60〕

目標段階の始めに位置する受容状態⁽⁶⁾への「転機」は、パール・S・バックにとつて理性的に把握できるものではなかったが、それは彼女の学習プロセスの第2の局面として理解されている。しかし、彼女が、このらせんモデルの諸局面をどんなに集中的に、そしてまた行き戻りをくり返しながら体験したかについて、彼女自身はつぎのように描いている。

「その第一段階は、あるがままをそのままに受けいれることでした。……でもじつさいは、いつきにそこへたどりついたわけではないのです。わたしは何度も何度も泥沼にすべり落ちたのです。自然にすくすくとそだつてゆく近所の子どもたちが、……。」〔70〕

パール・S・バックは受容状態⁽⁶⁾を次のようにも語っている。

「やっと分かりました……。」
「その頃のわたしは……他に喜びを見出せるものがいくつもありました。今思い出してみると、まず最初にわたしが喜びを見出したのは読書でした。そのときはたぶん、花だつたと思います。……ひとたびこころがそのように向きはじめると、わたしは、そうだそうだ、前にはこんなこともあったのだということに、いろいろ気づくようになります。また、それまでわたしの身辺に起こったことは、じつはわたしを変えていただけで、他のものにはなにも影響を与えていなかったのだということに気がつきました。」〔71,72〕

「わたしがします」という行動状態(こ)は、娘の将来のための施設をさがし、他方では親のための集中的な講演と啓発活動や、研究活動のための組織の設立する、そのための資金調達となつてあらわれている。

「とは申せ、わたしがこれからなにをするつもりなのかを知つても、またそれをどうして実行に移すかを考えても、わたしは逃れ出ることのできない悲しみを癒すことはできませんでした。でもそう知り、またそう考えることでわたしは生きる力を得たのです。」⁽⁸⁾

そして最後に、連帯状態(こ)の有様を見ることができ、「わたしたちがやります」という状態は、なによりもまず、彼女の自伝の著述と出版にもあらわれている。この本は他の多くの場合とくらべて、その率直さの点で傑出しており、それによつて著者と読者との関係が築きあげられている。

「すべてをありのままに書くことは、なまやさしいことではありませんが、本当にあつたことをそのまま書かなくてはなんの役にもたないことです。」⁽⁹⁾

このように、パール・S・バックは、すべての被害者と連帯し、歩みを共にしている。それは死を願うほどの孤独から共に活動し、終わりのない学習を続けながら行動へと向かう道である。彼女は次のように結論している。

「悲しみを受け入れなければならないし、悲しみを十分に受け入れると、そこから自然に新しい道が

開けることを知ってほしいのです。というのは悲しみには錬金術れんきんじゆつに似たところがあるからなのです。つまり、悲しみが知恵ちえに変えられることさえあるのです。悲しみが喜びをもたらすことはありませんが、その知恵は幸福をもたらすことができるのです。〔6・7〕

このようにパール・S・バックは、危機を学びのチャンスにしている。単に生きながらえるという以上の人生を成功させようと思つならば、わたしたちは互いにケアをする人間が必要であることを知る。危機対処の相互作用モデルは開かれた学習プロセスとしてこの目的に貢献するものである。

全部で二千冊をこえる伝記のすべてを分析すると、結果は、次のように要約される。

1 生活の崩壊、病氣、障害といった、さまざまな種類の危機を経験した伝記の著者は、危機対処において同じ学習プロセスの展開を伝えている。

それは次のことを意味している。危機対処の学習プロセスは、離別や迫害、死などの危機的な出来事の場合も、またエイズ、がん、精神疾患、障害などの場合も同じように展開している。それゆえに、その段階に応じた診断が可能であり、個別の状況に応じて適切に介入することができる。

2 攻撃は、危機対処の学習プロセスの中で、カタルシスの作用をする重要な役割をはたしている。

学習プロセスの中で、攻撃状態のらせん局面が欠落している場合は、拒絶状態もしくは社会的孤立にいたる傾向が示されている。逆に、学習プロセスでらせん局面の攻撃状態を耐え抜くならば、受容状態または社会的統合にいたる傾向が強められている。以上のことから、学習をとおして社会的統合を可能にするためには、危機への介入によって、欠落した攻撃をよび起こすことが求められる。(わたしの研究の一と二の事例研究を参照、エリカ・シューハート：伝記の体験と学理、一巻、また、危機対処としての生涯学習、2巻、8巻、二一 三年改訂増補版)

3 価値基準としての信仰は、攻撃に代わるもの、または攻撃を支持するものとなる。

信仰は受身的な態度をとり、危機に対して「アパティな対応」へと導く。あるいはキリスト教信仰は危機に対して、「共感的な対応」となりうる。どちらも社会的統合に向かっていく危機対処のふさわしい学習過程である。

4 ケアをするプロセスは危機対処の学習の前提条件である。

危機の中で適切なケアを受けなければ、被害者は危機対処の学習を中断することになる。また、その第一歩を踏み出すことさえ不可能な場合もあり、いずれにしても必然的に社会的孤立へと向かっていく。逆に、適切なケアを受ければ被害者は危機対処の学習が予防的かつ調停的に用意されることになり、社会的統合へと導かれる。